

水谷信子先生講演録

鈴木泰教授

水谷信子先生は、東京女高師文科を経られて、東京大学英文学科を卒業、そのちミシガン大学に留学され、日本語教育の草分けとして、以後40年にわたって日本語教育界で活躍されていらっしゃいます。昭和61年には、お茶の水女子大学国文科に赴任され、日本言語文化専攻の創設とともに言語文化専攻に移られました。そして、専攻の基礎を固められるとともに、優秀な人材を多く日本語教育界に送り出してこられました。そして、惜しまれながらも、今年度いっぱい退官されることになりました。パイオニアとして、ご苦労が多かったことと思われます。こうした教育活動の一方で、先生は学術研究の面でも活躍されていらっしゃいまして、日本語によるコミュニケーションの問題を軸にされ、外国語としての日本語教育に関わる諸問題、特に英語との比較対照研究にあたってられ、その方面においても、ご著書『日英比較話しことばの文法』の他の輝かしい業績をあげられています。簡単ですが、ご紹介は以上にとどめまして、先生のご講演、「言語と文化と日本語教育」に移らせていただきます。水谷先生、よろしくお願いいたします。

言語と文化と日本語教育

水谷信子教授

ありがとうございます。水谷でございます。きょうの前の三本のお話は大変ガッチリとした研究発表で、かたいものでございましたけれども、これからわたしが一時間、時間をいただいておりますことは、漫談のようなものでございますので、どうぞ、落書きでもなさりながらお聞きください。

今お話がありましたように、来年の3月に定年退官をするにあたりまして、国文学科と日本言語文化専攻の合同の研究会を催して、こういう講演の機会を与えてくださるというお話を伺いました時は、大変光栄なことと思って、ありがたくお受け致しましたが、考えてみますと、退官といいましても、勤めさせていただいたのはわずか9年間ですので、やや大袈裟過ぎて申し訳ない気が致します。その題として、長友先生から、これまでやってきたことを話せば、それが即ち日本語教育の歴史になるのだから、つまり、歴史的なお話ばあさんだから、ですから「日本語教育の40年」という題はどうかというお話がありましたけれども、日本語教育40年というには、脇道や試行錯誤

が多過ぎて、恥ずかしい気がしましたので、その脇道や試行錯誤を正面に据えて、「言語と文化と日本語教育」という題で、三題話をさせていただこうと決めました。自分のしたことをこんなに大勢のかたの前でお話しするというのはおこがましいことと思いますけれども、大学を出て仕事についてからの40年の間、活動というよりは悪あがきの跡を、皆様にお話しをすれば、日本語教育に少しでも関心のある方に何かの参考になるのではないかと思って、あえてここに参りました。お手許の一覧表には、ご参考までに、日本語教育関係の事項・簡単な履歴・主な著書などを記しました。ご覧ください。

ご存じのように、このお茶の水女子大学の前身であります東京女子高等師範学校は、わたしのいました頃は、数少ない女子の高等教育の機関でありましたが、わたしが入学したのは、昭和21年で、1946年、これは敗戦の翌年で、社会の混乱と寮の設備の不備のために、9月までは入学ができないという年でした。しかも4年修了のところを3年で中退しましたので、実際は2年半しか在学しなかったのですけれども、そこで過ごした2年半の思い出は強烈に残っております。まず当時非常勤で教えに来られた尾上八郎先生のお講義をはじめて伺ったときの感動は忘れることができません。受験勉強で必死になって読みました「明治文学史」にお歌がのっております、

「つけすてし野火の煙の赤々と見えゆくころぞ山はかなしき」という素晴らしいお歌がのっている、その柴舟先生がまだ生きて、目の前を歩いていらっしゃるということは、大変な感動でありました。またお若い専任の教官であられました井本先生の講じられました蕪村の句は、文学に遠くなりました現在でも心に残っております。専攻は文科の中の国語漢文でした。当時女高師には英文科がありませんでしたが、英語は好きでしたので、英語の曾根保先生・西崎一郎先生・北沢龍太郎先生などのお講義を熱心に伺った覚えがあります。

3年生の1月ごろ、それまで女子の入れなかった旧制の東京大学が女子の受験を認めたことが発表されましたので、急いで受験勉強をして、英文科に入りました。当時としては国文学もやりたい、英文学もやりたいという欲張った気持ちでした。英文科は、正式にはイギリス文学学科で、英文学は中野好夫先生、英語学は中島文雄先生、アメリカ文学は西川正身先生と、実に充実した教授陣でしたけれども、同級生には年長者が多くて、この3年間はいつも背伸びを強いられる毎日でした。英文学の花といわれるのは詩ですね。

英詩なんですけれども、詩よりは散文の方に興味を持ちまして、また、伊藤整の「小説の方法」に感動したりしまして、近代小説を勉強したいと思いまして、英国の近代小説のはしりといわれるHenry Fieldingという18世紀の作家について卒論を書いて卒業しました。

卒業したころは就職難で、結局就職せずにガリオア・フルブライト留学生として、米国のミシガン大学の大学院に留学しました。ここは英語学と英語教育研究の盛んな所で、英語教授法の代表的な学者であるCharles Fries先生の講義を聞くことができましたが、その当時のわたしの学力では残念ながら十分に咀嚼することができなかったと思います。アメリカ文学についての講義も聞きましたが、当時はまだ、英文学が主流であるという考えが強かったようです。特に興味を持ちましたのはMark TwainとEmily Dickinsonでした。Mark Twainはそのユーモアの面に興味を持ちました。余談ですが、子供のころから、なりたかった職業の一つは漫画家で、ユーモア作家にも興味を持っていました。卒論にHenry Fieldingを選んだのも、英国の近代小説のはしりであるということの他に、荒削りなユーモアの持ち主であったということが一つの理由でした。それに対しまして、Emily Dickinsonという詩人は、この英文科の、お茶の水の英文科の卒業論文にもよく取り上げられていますが、強烈な宗教的な感情を謳った人で、日本人には取り付きにくい詩人だと思います。この人の生涯には謎が多くて、当時はほとんどそれが解明されていなかったということも、魅力の一つでした。今でも、もし長生きして体力があったら、この人の住んでいたアメリカ東部のAmherstという町にしばらく滞在して、資料を集めて、この人の生涯を小説にしてみたいという、とてもできそうもないことを夢んでいます。

米国に留学していた間、非常に気になったことは、日本人である自分が文化の二重性を背負っているということでした。二重性というのは、伝統的な日本の文化と明治以来ふんだんにとりいれている西洋の文化との二重性です。卑近な例でいえばふだん洋服で、晴れの場合に和服を着る、横文字の文学を研究しながら、実は俳句や和歌に心引かれるということです。それに対して、周囲の若いアメリカ人の学生を見て、何かそういう二重性の悩みがなくていいなあと思ったりしました。これはもちろん皮相の見解で、彼等は彼等なりに異なる先祖をもち、異なるルーツを持って、いろいろな相剋に悩んでいたのだらうと思いますけれども、当時はまだ、アメリカは一つという雰囲気

がありまして、多民族国家であることや各自のルーツについての論議があまりなされていない時代だったように思います。

とにかく、綿菓子のような取り止めのないことで頭を一杯にして7月ごろ帰国しました時に、国際キリスト教大学で日本語を教える仕事があるというので、ほかに職を探すこともせず8月に助手になりました。集中教育のために夏休みもなく授業が行われていたのです。当時、外国人に日本語を教えるという仕事は滅多に耳にしない特殊な仕事で、それまで一応英語の畑を歩んできた人間には唐突な話であったはずですが、わたしの場合はとくに違和感も感動もなく、すんなりと入ってしまいました。これには幾つかの要因があったと思います。一つは東大の英文科の前は女高師の国語漢文に属していたということ、また直接の動機に近いものとしては、ミシガン大学でLado博士を中心に行われていた、外国人に対する英語教育の実験的な場面を見学した経験もあります。さらに遠くは、小学校時代に戦時中の南方における日本語教育の話を耳にしていたことが、侵略戦争と結び付いたものとして記憶の片隅に押しやられていたのですが、それが浮かび上がってきたのかもしれない。また、もう一つありましたのは、小さい時つきたかった職業の一つが国際スパイであったということも、国際的ということで、かすかな関連があったかもしれません。

とにかく国際キリスト教大学へ入りまして、学生は香港からの中国人学生が5名のほかは、あと十数名日系も含めたアメリカ人、カナダ人、ドイツ人など様々でした。初めの頃はいわゆるGIビルとして、戦時中兵役に服した報酬として学費を得ている学生もかなりいました。日本語の集中教育の流れに入ってしまうと、生活が一変してしまいました。これは初め日本語を全然知らなかった学生に1年間の集中教育をして、2年目からは大学の授業が聞けるようにするという仕事ですから、学生も大変ですが、教師も大変です。学生の日本語の程度は昨日ときょうでは違うのですから、学生に話しかける教師の日本語も毎日変えていなければいけません。例えば教科書に「少し」ということばが入っていても「ちょっと」という語彙が入っていなければ、「ちょっと待ってください」と言わないで「少し待ってください」と言わなければいけない。「ね」という終助詞を教えてなければ、「そうですね」と言わないで「そうです」と言わなければいけない。そういうような具合で、一日勤め上げて大学を出るときは、なんだか自分が普通の日本人ではなくな

ったような気がしてきました、家へ帰るとまずテレビをつけてメロドラマを見る、時代劇を見る、落語を聞くというように、普通の日本人に戻る努力を致しました。この集中教育の仕事は、後にスタンフォードセンターに移るまで、8年半に及びました。当時、日本語を学ぶ外国人はごく少数でしたし、日本語教授法というような書物はまれでありました。長沼直兄の書きました「標準日本語読本」の第1巻に付随するGrammar & Glossaryという本や、Eleanor Jordanという人の書いたBeginning Japaneseの文法説明などを精読する。あるいは諸学者の文法書を自己流に読み散らす。その他に、非常勤でおいでになった金田一春彦先生や柴田武先生のお講義に出席する。そんなことで、その日その日を過ごしておりました。その片手間に大学の英語の教材を手がけたり、英語の小説の翻訳などをしておりました。おもなものは、女高師時代の恩師西崎一郎先生との共訳の『ミシシッピーの人びと』という上下2巻であります。これはMark Twainの“Life on the Mississippi”という、あまり一般に知られていない長編であります。Mark Twainにつきましてはもう一つ、非常勤講師をしておりました武蔵野女子学院短大の紀要に英文の短い論文をのせました。またアメリカ文学会に入っておりまして、Willa Catherという女流作家について発表するなど、細々と英文学界の隅っこにも足をつっこんでおりましたが、1960年に、当時かなり出ていました「言語生活」という雑誌に、「外国人の作文を分析する」という文をのせた辺りから、日本語教育の方に心を傾けるようになりました。

この間に、海の彼方ではチョムスキーの生成文法が産声を上げ、日本の文法学者の間にも研究者が増えてきました。1966年にはチョムスキー自身が日本に来日したりしています。日本語教育についての研究会が発足したのは1961年です。その時わたしも参加しましたが、この時は総勢が30人ぐらいでした。それが、翌年に「外国人のための日本語教育学会」という学会になり、その時は300名程の会員が集まりましたが、それから32年たった今では会員が4000人近くになっております。

日本研究センターに移りましたが、日本研究センターといいますのは、当時はStanford大学の海外の分校のようなもので、目白の椿山荘の近くの和敬塾という細川侯爵の寮だったところだそうです。そこの建物を借りまして、Stanford大学の学生に日本語を教えておりました。その時の専任はBerkleyでPhDをとられたばかりの青木晴夫先生とわたしの二人だけで、非常勤の先

生が数名おられました。その非常勤の先生方の中には、去年まで言語文化専攻の非常勤講師をお願いした川上泰先生、以前に国文科の非常勤講師をされたと思います大曾根先生もおられました。翌年にはアメリカとカナダの日本学の講座をもつ大手、ハーバードとか、コロンビア、イエール、ミシガン、ブリティッシュコロンビアなど十一大学日本研究センターというふうに改名しまして、以後、様々な大学の学生が来て、1年間中上級の日本語を学ぶところとして、多くの業績を上げるようになりました。この年から、当時千葉大学で日本語を教えておりました水谷修が言語課程主任、当時ではちょっと聞き慣れない名前でlanguage program coordinatorという名前で参加しまして、十年間勤めました。場所も和敬塾を出て、国際キリスト教大学で一時間借りをしまして、そのあとは、麹町の文芸春秋ビルの近くに移りました。教員も次第に増えまして、教材の開発も始まりました。センターの学生はアメリカやカナダの大学で2年以上日本語を学んだ者となっていました、大学の間にも、文法訳読中心の大学とそうでないものとの差がありまして、学生もいろいろでした。最初のインタビューの時、わたしどもが「いまどこに住んでいますか」と聞きますと、「みずからは、吉祥寺に住まい致しております」と、そういうふうに答える学生もいる。一方では、日本に非常に慣れているものもいる状態でした。こういう多様な学生のために、まず、「会話中級」という教材を作りましたが、これは出版にいたりませんでした。ほかにも出版にいたらなかった教材は幾つもあります。

センターで出版された教科書として代表的な“Integrated Spoken Japanese I”という本があります。略してISJ-Iとっておりますが、これは出版されたのは1971年ですが、最終的に本の形をとるまでには、数年間実際に使いましたし、出版の準備もかかりましたので、制作に取りかかったのは60年代の半ばだったと思います。Integratedというのは、文字通りには「総合」ということですが、書きことば的な本文と話しことば的、話しことばの会話という文体的な総合を目指す、もう一つ聞き取りや文型の練習にも多角的なアプローチをして、練習方法にも総合的な性格を持たせるという教材で、当時は類を見ないものでした。ただ、語彙的には当時の社会を反映した学生運動関係の語彙ですね、「内ゲバ」とか「中核派」などというものもありまして、いま見ると古さを感じさせますけれども、構成としては優れた作品であると自負しております。わたし自身は本文のいくつかと、練習問

題と、応用会話など、かなりのり部分の執筆を担当しまして、時間的にも精神的にも多くのものを注ぎこみました。大袈裟に言えば、わたし壮年時代の汗と涙の結晶ともいえます。この「総合」の考えがのちに1986年頃から『総合日本語』シリーズの教科書をいくつか書くもとになったと思います。

話しことばの基本としてISJ-Iを使うと同時に、新聞の読解、新聞を読むこととテレビの聴解、テレビを見ること、これを組み合わせて、総合的な能力の向上をしめすということにも、多くのエネルギーを注ぎました。この「総合」的な教材、「総合」的な教育というのが、センターで得た大きなものですが、もう一つセンターで得たものは、学習者を人間として尊敬し、その考えを尊重するという姿勢であったと思います。当時の学生は、現在も同じようであろうと思いますが、奨学金で生活をたてる、また奨学金を得ていることを将来の履歴に役立てようとしている者ばかりでしたから、知的な仕事に向いた頭脳をもっていて、学業にも真剣でありました。真剣というより神経質でありました。こういう学生の集まる小さい4、5人のクラスが基本でしたから、我々日本人教師の感じる緊張もかなりのもので、授業の能率を上げると同時に学生にばかにされないようにする、という努力で疲れる毎日でした。また、文学や歴史などに比べまして、語学に対する評価が一般に低く、センター自体が発足間もないという事情もありましたが、当時の日本の経済力に対する評価も、もちろん今より低く、また国の内外における日本語教師一般に対する社会的評価も、現在よりは低かった時代です。とにかく、日々優秀な学生を相手に悪戦苦闘した経験は知らず知らずのうちに、学習者を大切にすることを育ててくれたと思います。いま日本言語文化の学生の夏の教育実習の時に、1時間の授業が終わった時には、授業が始まる前と終わった時とでは、学習者が自分の能力が1時間分だけ伸びたと感じるようにせよ、というような厳しい注文をつけるのは、この時代の感覚が顔を出しているためかもしれません。

センターの教育内容は、9月に来日しまして半年ぐらいは、日本で生活して、日本人の学者と話し合いができるような日本語の運用能力をつける、これが半年です。後半は討論や論文作成のための日本語を学ぶ、また専門書あるいは専門にはいるための導入の文献を読むというのが基本的な線でした。専門性の高いものはセンター外の専門家に依頼しましたが、専門導入といわれるものは、センターの教師が頑張って教えなければいけない。これは、今、

諸大学で先生がたが日本事情の教え方に苦勞されているのと少し似ていますが、センターの学生は大学院生が主で、専門性はかなり高い場合が多かったので、こちらも苦勞しました。学生の専攻は、はじめは日本の歴史や古典文学が多かったんですが、のちに政治・経済・法律・経営などが増えました。さらには理科系も加わりまして、精神医学を研究する学生なんかも日本語を学びに来ました。この初めの頃は特に、外国人が日本語を話したり読んだりすることは珍しかった時代でしたけれども、学生の日本語力は会話の方はそうでもないんですが、専門の分野ではかなり高いものが多かったと思います。これはヒヤッとした経験ですが、ある時、日本では、夏うるさく鳴く蟬ですね、蟬の声は単なる騒音ではなく、文学の題材にもなるんだという話をしてまして、そこから芭蕉の「やがて死ぬけしきは見えず蟬の声」という俳句を紹介しました時、コロンビア大学の女子学生が突然横から「先生、あの、『死ぬ』というのはナ行変格活用ですから連体形は『死ぬる』じゃないんですか」と質問してきた時は、一瞬ヒヤッとしてしまいましたが、そこはなんとか女高師時代の記憶をふり絞りまして「活用というのは時代によって変化する。ナ行変格活用は江戸時代には四段活用になっていたのだ」と説明して、納得させることができ、ほっとしたことがあります。文学のほうは、そんなふうで何とかかなりましたけれども、ほかの科目はそうはいきません。特に歴史などもわたしの方の知識が少ないし、学生の専攻分野が細かく分かれていて、専門的な質問が多いので、専門導入指導の前は日本史辞典と首っぴきで徹夜に近い準備をしましたが、そうした知識は不思議なくらいパッと消えてしまって、今は何も残っておりません。

専門の関係はその日その日が精一杯で、知識が身につかなかったんですけど、話しことばの分析と教育という点ではセンター時代の苦勞が少しずつ形をとって現れるようになってきました。一つは自然な話し方を考える時に、どうしても避けて通ることのできない「あいづち」の問題です。学生が一通り日本語で話ができるようになって、実際のコミュニケーション際しては、まだまだ不備なことが多い、それを改善するにはどうしたらよいかということを、教師たちが集まって、夏休みを返上して研究を始めました。これは、1973年頃であったと思います。さきほどお話したISJ-Iは1971年に出ましたが、その時にはこういう総合教材がその後の発展をするものと予想してISJ-Iと名付けたんですね。それで、ここではISJ-IIに進もうという

ことになったのです。ISJ-IIという名前の教材そのものは、ついに出版を見ませんでしたけれども、この時の研究会の成果が教師たちの論文になったり、業績になりました。この時取り上げられた問題の主なものは、「あいづち」「ポーズ」「強調」「イントネーション」などでしたが、「あいづち」はわたしが担当することになりました。この時「あいづち」を担当し、教材化したことが、その後の研究の一つの方向を決めるきっかけになりました。

「あいづち」を教えるとか「あいづち」の教材を作るという話をしますと、今でもまだ何のことだろうという顔をされることがあります。20年前にはあいづちを取り上げて分析的に考えるということは、ほとんど行われていなかったと思います。センターであいづちを教えるようになったきっかけは、学生が日本人と話す時に、期待された時にあいづちを打たないためにコミュニケーションがうまくいかない、あるいは、学生が日本人の話を誤解したりするということです。誤解といいますのは、日本人と話している時に、その相手の日本人がたえず「はい」「はい」と言っていたので、当然自分の考えに賛成しているのだと思っていたんだが、いざ話し合いを続けてみると、全然賛成ではないことがわかって、なんだかだまされたような気がした、というような話をよく聞きました。これは、「あいづち」の「はい」が必ずしも賛成ではなくて、「そこまでわかったから、どうぞ先へいってください」といういわばシグナルのようなものである、ということが理解されていなかったためですね。あいづちと返事とは区別が面倒ですが、わたしが「あいづち」として取り上げましたのは、相手の話が終わらないうちに、句切れごとにさしはさむ「はい」とか「ええ」とか「うん」のようなことばです。外国人特に英語圏の学生の場合は、相手の話が終わったらただちに返事をすることは礼儀だけれども、途中で口を挟むのは礼儀に反するという考えが強いため、話の途中のあいづちの方を教える必要を痛感したわけです。わたしたちが実は話を聞きながらあいづちを打ちますのは、基本的には相手が話しやすくなるようにという、いわばサービス精神でやっていることですが、ところが違った言語観をもつ人には、これはサービスどころか失礼だという印象を与えます。これは、その後、あいづちを英語で解説しようと考えたために、英語を母国語とする人、十数人に、「あいづちは英語で何といったらいいか」というようなことを尋ねて回った時のことなのですが、あいづちのところを和英辞典などでひきますと、“answer” “reply”、返事ですね、と出ていま

す。また、たまに、“to chime in”という訳語もあるのですが、これはよく考えずに相手の言ったことに機械的に賛同するというような含みがあって適切ではない。大抵の人が「英語には同じものがないからaizuchi とローマ字にしておいたら」という意見だったのですが、中に一人、決然として口調で“*Oh, that's interruption!*”と言った人がありました。interruptionというのは「中断」「妨害」という意味ですから、わたしはびっくりしまして、“*Interruption?*”と聞き返しました。するとその人は、中年の女性でしたけど、“*Yes, interruption. Why do the Japanese keep interrupting me when I speak Japanese!*”と非常に腹立たしそうな口調で言いました。これはもう20年も前なんですけども、いまでも印象にのこっています。その人は、その後も「自分の日本語がへただから、もう止めろという意味で、はいはいと言っているのだろう」と言って、怒っておりました。

これは、日本人がサービスの気持ちでやっているのに、こんな逆の印象を与えるわけですから残念なことだと思ひまして、その後は心ひそかにあいづちキャンペーンを志し、目指しまして、国際交流基金やY M C Aなどで、日本語について英語で話をする機会があれば積極的に出かけて行って、話の中で必ずあいづちの説明に言及するように致しました。1981年にも国際交流基金で講演を頼まれまして、あいづちのその他の話をした時に、その時基金の招きで来日しておられたカナダのある大学の先生ですが、日本文学の先生ですが、興味をもってくださり、その方の勧めで翌年のSociolinguistics Newsletter という雑誌にあいづちの論文をのせてもらうことができました。この論文のためにあいづちの頻度などを調査したんですけれども、その結果わかったことは、「あいづち」が日本語の話しことばの性格と深く結び付いているということでした。頻度からいいますと、大雑把に言って、相手が1分間話す間に、聞き手は平均20回あいづちを打ちます。話す速度は平均して1分間に350から450音節、真ん中で400音節ですから、大体20音節ごとに一度あいづちを打っていることになります。20音節といえますと、例えば、「昨日はおいそがしいところをおじゃまして」と言うと、18です。「きのう新幹線に乗っていたら地震があって」で23音節です。つまり、字で書けばちょうど読点を打つぐらいのところに、音声的にあいづちをさそう調子が出る、で、相手はあいづちを打つ、ということになります。そこで聞き手があいづちを打たないと話し手は不安になります。このことを

実証するには、電話口であいづちを打たずにじっと黙っているだけで十分です。わたしはときどきこの実験をしますけれども、これは、セールスマンが相手の場合に限ります。とにかく20音節以上の長い文を一息で言うことは実際には会話ではしない、少ない、ということです。ですから、会話の指導だと言って数行の長い文を暗記させたりすることは、これは、文の構造上の理解には役立っても、会話の練習としては現実的でないということになります。

また、あいづちの多い話し合いを観察していると、聞き手がその相手の後をひきとって文を完成させることがあります。「実はこの週末にちょっと日光まで」と言う、そこまで聞いて、「あ、いらしたんですか」と受けてしまう。「ゆうべの地震、大きくて」というところまで聞いて「こわかったわね」と答えたりします。このセンターであいづちの教材を作りました時に、テレビの番組をとって一部を見せたんですけども、だいぶ前ですが、その中である家事評論家とアナウンサーの対談がありました。どちらも女性でしたが、6月頃でしたね、アナウンサーが「公務員の方のボーナスが」と言いますと、家事評論家が「出ましたね」と受けました。またそれから、どちらか忘れましたが一人が「今年のボーナスは大型と」と言いますと、他方が「言われておりますね」と受けました。これを見て、学生は大変びっくりしました。こういう受け方は、誰もがいつもやるというわけではなくて、人や場面によって違うんですけども、これにfinish up という名前をつけて説明することにしましたが、これは、違和感を与えることは少なくサービスで行われることが多い。これも、日本語の話し方の特徴の一つであろうと思います。つまり、途中まで言って、文を完成させなくても相手が完成させる。ときにはむしろ完成させないで相手に完成の余地を与える方がいいとされますので、全部言ってしまうのは切り口上になりますので、客が辞去する時などは「ちょっと回る所がありますので、」とまで言えば、「これで失礼します」は言わなくてもよい。こういう傾向がありますので、これがいわゆる省略の多い話し方につながります。このことが理解できない外国人の中には「日本人の話し方はin- complete sentencesが多い」とか、fragmentary、というのはつまり断片的だというような批判が出てくることがあります。実はこういうことを言う学習者自身の母語、英語などでも、簡単な語句だけの、いわゆる完全文でないやり取りも多いんです。多いんですけども、外国語として日本

語を学ぶとなると完全文という意識にとらわれてしまうんだと思います。しかも、あいづちは、相手の言うことが終わらないうちに、ちょっと被さって打ってしまうこともありますので、極端に言いますと、二人の文が一人の文のように聞こえることがあります。ラジオで座談会などを聞いていると、実際には数人の人が話している筈なのに、まるで、一人の人がずっとしゃべっているように聞こえるというような感想を持つ外国人もいました。

とにかく、少し話しては相手の反応を見る、途中まででやめた相手の文の後半をこちらが理解し、時には完成させるという話し方は、日本語の基本的な傾向であると思いますが、この話をした時、さきにお話ししましたカナダの先生が、「それは日本文学の連歌に通じるものである」といって感激なさいました。わたしはそんなに連歌のことはわかりませんので、何とも言えませんでしたでしたが、歌舞伎の「割り台詞」にも似ているのではないかという考え方もあります。が、「割り台詞」には、あいづちと違って、二人の人がそれぞれ別の台詞を分けて言っている形もあるそうで、この点ではわたしはまだ不勉強ではっきりした共通点が出せません。ただ、あいづちというのは、言語現象ではありますが、その背後にある文化との関係が深いものではないかと思います。二人の人がそれぞれ自分の言い分を完結させてから他の人が話し始めるのは、いわゆる「対話」ではないかと思います。この「対話」に対して、あいづちの多い話は一緒になって話しますので、「共話」とでも呼ぶべきものではないかということを、1980年に雑誌「言語生活」に書きました。「共話」はわたしの造語ということになりますが、その後このことばを使う人が、特に日本語教育関係者の中に少しずつ出てきました。

センターに移ってからもしばらくは英語関係の仕事が続け、幾つかの啓蒙的な英会話書を頼まれました。その中で一つ最初の出版は1968年で、この時に現実の生の英語をなんとか収録して伝えたいと思い、アメリカ人、ニュージーランド人などの家庭にテープレコーダーを持ち込んで、食卓の会話を録音してもらい、その一部を書き取って、本にしたものがあります。これは26年もまえのことですから、テープレコーダーといっても、今のような小さいカセットではなく、オープンリールの大きなもので、持ち運びにも苦勞しましたが、何よりも苦勞したのは、自然な話しことばということにまだ一般の理解がなく、録音を引き受けた家庭で、せっかく一度録音した自然な発話を消してしまっ、あとに模範的な文を入れるというようなことがあり

ましたりで、書き出したものを念のために一応見せにいくと、それをみて、「わたしはYeahなんて下品なことばを使った覚えはない、Yes と直してくれ」と言われたりしました。本の題も「自然な英語」にしたいと思いましたが、出版社のほうで、それでは売れないから『ファミリー米会話』としたいという話がありまして、結局、英語名の“American Families in Tokyo”をつけることで妥協しました。英語教育の雑誌に取り上げられたこともありましたが、あまり売れず、後に日本語教育関係の人が問い合わせたら絶版になっておりました。その後、ISJ-IIの英語版に当てるつもりで73年に『心をつかむ英会話』、英語名“Heart-to-Heart English”という本を出し、その中ではムードを表す助動詞やtag questionなどを中心に書きましたが、これも不発でした。ちょっと残念だったと思います。これにも懲りず1983年には『英語の生態』という本を出し、この中では“Nihongo Notes”に書いたような、社会言語学的な問題と語彙・発音などの問題を取り上げました。

ほかに、大学の英語の教科書として幾つかの注釈書を出しましたが、その中で、日本語教育と関係のあるのは、73年の“Dear Ann Landers”という、これはLanders おばさんなんですけど、新聞の身の上相談欄を集めたものでした。これはセンターの授業でいろいろな日本語の新聞記事を扱った時、学生が身の上相談欄に興味を持ったのがきっかけでした。例えば、アパートの二階の騒音をどうするかというような相談に対し、30年も前ですから、大家さんに相談せよというような回答があった時、アメリカ人の学生が「なぜ警察を呼ばないのか」というような疑問を持った、そのことから、社会的な慣習の違いを面白く思い、また、これは新聞社のやらせかもしれませんが、とにかく英文が自然でありましたので、当時の本学の英文科の先生だった長谷川潔先生と共著で出したものです。これは少し版を重ね、ほかの人が“Ann Landers”の第2巻も出したようです。英語関係の仕事としては、旺文社がラジオの文化放送で流している「百万人の英語」の講師を4年ほど勤めました。週2回の時が多く、忙しい思いをしましたが、日本語教育と関係のあったのは、drill の工夫をしたことです。英語の会話の練習といいますが、A Bの一問一答で終わってしまう、しかし生徒が答えているだけでは話す力が付かない、話す力を付けるためにはA B 2行で終わらずに、A B A Bと4行5行にわたる文型練習がよいと考えて、response drillという名前の練習問題を作りました。これを発展させたものがのちのUsage drill（使い方練

習)あるいはDiscourse drill (談話練習)になりました。今考えると、英語の放送が日本語の教材作りの準備になっていたともいえます。

国際キリスト教大学でもセンターでも学生が英語話者であったこともあり、日本語と英語との比較には関心を持っていましたが、論文らしいものとしては1969年に学会の研究誌にのせた「日英両語の比較——仮定法を中心として」が最初でした。その後細々と研究を続けた結果が、1985年の『日英比較話しことばの文法』にまとまりました。この本の中では、例えば、「だれかがわたしの足を踏んだ」という言い方が、事実をそのまま伝える事実志向の文であるとすれば、「足を踏まれた」は、自分の立場からものを言う立場志向であり、日本語には立場志向的な表現が多いということなどを書きましたが、それとともに、学習者の誤用は実際に日本語を使ったために表面に現れたものであるが、使わないために表面に現れないもののほうが、母語の影響を強く受けているのではないか、という考えから、これに「非用」という名をつけて考察することを提案しました。

1976年から数年間、日本語教材や参考書の出版が続きましたが、その主なものとして、水谷修と共著の“Nihongo Notes”と“Modern Japanese”のことを申し上げたいと思います。“Nihongo Notes”は、平生外国人の学習者が疑問に感じていると思ったことを、76年に英字新聞Japan Timesの日曜日の欄として、書いてほしいと頼まれ、半年間の約束で始めたのですが、当時はこうした観点からの記事が少なかったと見え、延長の申し出があり、1990年まで14年間毎週書き続け、70編ずつ本にまとめたのが10冊になりました。これは日本人の挨拶、遠慮表現、待遇表現などの諸問題を、具体的に例を上げ、ユーモアを交えて説いたもので、外国人の読者のほかに、英語の教科書として使うところも出たのは嬉しいことでした。フランス語訳、スペイン語訳、韓国語訳、中国語訳、タイ語訳などが出たあと、最後には自分で日本語訳もつけることになりました。もう一つは、“An Introduction to Modern Japanese”という日本語の入門から初級の教科書です。この本の中では、当時かなり多かった「わたしは先生です」式の教室日本語を排して自然な日本語を学ばせることを第一としまして、音声面での配慮を重視して、アクセント、プロミネンス、発音練習などをつけ、練習問題に工夫をしまして、現在幾つかの機関で採用されて、何回か版を重ねております。

さて、わたしが日本研究センターという小さな語学機関の中で日夜悪戦苦

闘をしていた間に、日本語教育をめぐる社会の情勢は少しずつ変わってきました。72年に外務省関係の特殊法人として国際交流基金が設立されて、日本語・日本文化の海外での普及に力を尽くすことになりました。わたし勤めておりました日本研究センターは、この基金に全運用資金のかなりの割合に上る援助を受けることになりまして、センターと基金の関係が深いものになりました。76年には、国立国語研究所に日本語教育センターが設置されて、教員の訓練や養成も手がけるようになりました。77年に、日本語教育学会が社団法人となり、教師や研究者の情報交換だけでなく、教員養成などの仕事もするようになりました。基金は巡回指導といって、海外の日本語教師の研修を援助するために、日本から教師を派遣するようになりまして、80年にはわたしも5週間の巡回指導でニュージーランド・オーストラリアを回りまして、オーストラリアのモナシュ大学では後に文部省招聘の研究者として本学にお招きしましたネウストプニー先生にも久しぶりにお目にかかりました。また、この時には学会員が作った日本語能力予備試験を実験的に施行する仕事もしました。また、基金の関係でいいますと、海外に派遣する教員の訓練のための実習を頼まれまして、1984年から88年まで4年間、毎週2回、日本研究センターの仕事の後、夜6時から10時まで指導に当たりました。当時日本研究センターは麴町にありまして、基金は紀尾井町ですから、歩いて5分という大変近い所にあったのは幸いなことでしたけれども、センターは大学ではなくて、語学校ですから、毎日9時5時の勤めで、この4年間の重労働はかなりのものでありました。僅かに残っていた若さと体力と、ほとんどなかった美貌などもすり減らしてしまいました。しかし、実習生というのは終わったらすぐ海外で教えることになっていますから、非常に熱心でまじめで、やりがいがありました。また自分の書いた教科書“Modern Japanese”を使っただけの方法論がかなり固まったのも、この実習指導のお陰だったと思います。

1975年頃から日本語学習者の増加はめざましくなりまして、教育機関も増えました。日本語教育に対する社会の見方も変わってきました。「へえ、日本語を教えているんですか。英語の先生になれないから」というような顔をされないようになりました。しかし、この頃はまだ日本語の教師は国語・英語・教育・心理・など、様々な分野の出身者が多くて、日本語教育という専門が4年制大学の科目になるとは、考えにくいことでしたが、それが意外

に早く、85年には国立大学に日本語教育の主専攻ができて、時代が変わったなあと感じました。が、翌86年には本学の日本語・日本事情の教師として採用されるということになりまして、本当に夢のような思いをいたしました。お茶の水女子大に参りましたのは86年4月でしたが、その年の6月に日本語教育基礎コースが誕生しました。これは各学部共通の授業ですが、国文学科が世話学科ということで、当時の主任の市川先生や、堤先生、犬飼先生、浅井先生などの諸先生方のご助言を得て、日本語教育法の講義演習を2コマ開講しました。国文科のほかに、英文・中文・史学・教育・舞踊などの学生や、家政学部あるいは理学部の学生も聞きに来てくれました。翌年から、演習も始めました。翌年というのは87年ですね。87年には、日本語教育能力検定試験、いわゆる検定試験が始まりました。この頃から、本学や他大学の卒業生で日本語教育に携わっている人たちが聴講生として次々に加わり始めました。どの教室でも聴講生は、教師のことばをひとつことも聞き逃すまいという意欲に燃えまして、学部生を圧倒するような熱気を放っておりました。この時の聴講生から後に大学院に進んだ人もおります。聴講生のほかに外国人留学生も増えまして、なかには帰国して専門を生かした教職につけるとは限らないから、日本語を教える能力をつけておきたいという学生もかなりいました。当時修士課程で日本語教育を専攻したいという留学生、特に台湾からの留学生が多かったんですけれども、その学生に「日本語教育の修士課程はできないのか」という質問を度々受けました。本学は都心の交通の便の良いところにありますので、社会人のために夜間の講義を含む大学院を作ることができたらいいと、わたし自身もひそかに思っておりましたが、新しい専攻を作るというのは大変な大事業ですから、当分はかなわぬ夢と諦めておりました。それが意外に早く実現したのは、国文科の諸先生方、特に三木先生のご尽力と、佐藤・大口2代の学部長、会計課長や文教育学部事務長のお骨折り、さらに前学長河野先生のお力ぞえのお陰です。それに加えて、白百合女子大学の教授から助教授に降格しておいでくださった市古先生、また、目の前の教授昇任を振って広島大学から助教授としておいでくださった長友先生、このお二人の心意気など、実に多くのかたがたのご努力のお陰で、平成3年についに日本言語文化専攻が発足しました。

新しい専攻ですから、様々な不自由や苦勞がつきまとうのは、当然です。40年も日本語教育に関わってきたわたし自身にとっては、これはむしろ嬉

しい苦勞でありますけれども、国文科や協力講座の先生がたにとっては、大変なご災難であろうと思いますと、何か身の細る思いをしまして、「お邪魔虫で、どうもすみません」と絶えず口先だけでなく心の底から感じておりました。さいわい優秀な修了生が次々と巣立って博士課程に行ったり、社会に出ていくという実績も上がり始め、新専攻も軌道に乗ったという感じがしております。新専攻の発足以来、雑用が多いということを申し訳にしまして、わたし自身の研究業績にはほとんど見るべきものがなくて、紀要その他の論文のほかは、僅かに、総合教材のシリーズとして、『総合日本語中級』『同前期』『初級から中級へ』などの教材を出版する程度でした。また、日本語学習を楽しいものにしたいという願いから、88年に『日本語かるた』93年に『初級日本語スキット集』を出しました。このスキット集というのは、さきにお話しした談話練習の一つの形として、現実の場面に近い形で面白く会話を学ばせたいという願いから生まれたものですが、もとは国際交流基金での実習の時に、実習生の創意による談話練習を見まして、若い人の感性から生まれた作品を埋もれさせるのはおしいと思ひまして、原作者の同意を得て、一部手直しして、使い方の練習説明をつけて、本にしたものです。「かるた」の方も基金の実習生の人たちが作ったものをある程度生かしたものです。この場合、盗作ばあと言われぬように、あちこちに散ってしまった実習生の同意を得ることが大変な苦勞でした。

現在の関心事としまして、できれば調査や研究をしてみたいと思つていうことは、談話の分析です。1980年頃に日本研究センターに短いものを書いた後、文部省の科研費の研究などで少しずつ続けておりますが、今後、時間的余裕ができれば、じっくりと取り組んでみたいと考えております。外国語として一つの言語を学習する場合、単文ですね、一つの文は何とか正確に作ることができても、その後どんな文が来るのか、その前はどんな文が来るのかということは、なかなかわかりにくいことです。母国語の場合はそれがかかなりよくわかっている。それで、人の話を聞いていても、この後は大体どんな文が来るか見当が付いているので、ある程度予測が可能で、適当に緊張を解いて、いわば省エネして聞いていることができます。予測が聞き取りを容易にしているという実態が明らかになれば、日本語教育に実際に役に立ちますが、そうした実際面を別にしても、談話の展開というのは面白いテーマだと思います。例えば、人の話を聞いていておかしいと思って笑うのは予

測がはずれた時が多いのではないかと思いますので、この視点からユーモアや落語の構造などを分析してみたいなあと考えております。あと、条件表現ですね。日本語では「いつ伺ったら宜しいでしょうか」とか「どうすればいいんだろうなあ」というような条件表現を使うことが多いのですが、外国人学習者にはそれが身に付きにくいために「いつ伺うはずですか」とか「どうすべきか」などが多くなるんですけれども、これも、広い意味での談話の展開に入るとして、調べたいと考えております。ただ、体力も時間も、もうあまりありませんので、自分では大したことができないのではないかと、若い方々に研究をしていただきたいなあと考えております。

さて、最後に新しい専攻が発足してから4年間のことを考えますと、講義にせよ、実習にせよ、自分の若い頃からのいろいろな悪あがきの経験を何らかの形で生かすことができたという点で、大変幸せであったと思います。日本言語文化専攻は制度としての充実だけでなく、研究態勢の整備の点でも目をみはるものがありまして、学生たちが、言語文化の名にふさわしい研究をどんどん繰り広げています。今ここで修士論文の題目をたくさんあげることはできませんけれども、例えば、「言語と文化と日本語教育」というきょうのお話の題に因んで、二三、申し上げますと、日本語の感情表現の分析などは、これは言語そのものでしょう、日本の書簡文、手紙に表れた季節感を論じたもの、これは、文化に入るでしょう。「学習者の推量表現の習得状況」とか学習者の助詞の習得を一定の期間にわたって追跡分析する、調査する、こういうものは、言語と教育の問題でしょう。感謝や詫びの表現の使用状況の分析などは、言語と社会の関わりに結び付きますし、日本人の考え方という文化の面とも切り離すことができないと思います。そのほかに、あいづちの分析や談話の研究などもありました。わたし自身はこうした言語と文化と日本語教育の絡み合いの中で右往左往し、まごまごしながら生きてきたんですけれども、その中でとらえたあいづち「非用」「立場志向」の問題など、わたし自身は考えつくだけで、より深く掘り下げるに至らなかったことを、日本言語文化専攻の学生たちが、あるいは数量的・統計的に分析したり、外国人学生対象のアンケート調査をしたりして、研究論文に仕上げてくれていることは、望外の幸せです。いわばいい加減に撒き散らした種が、思いも寄らなかった美しい花を開くのを見る思いがいたします。こうした素晴らしい花壇を用意してくださった先生方、特に国文科の先生方にはお礼の申し上げよ

うもありません。この花壇には、これからも、三木先生・浅井先生のお教えを受けた日本文化学の研究、長友先生を中心とした言語習得、平田先生の音声、本郷先生の教授法の研究など、新しい花が次々と咲くと思います。その花壇を、もう少し長生きして見せていただきたいと思っております。長くなりました。ご静聴ありがとうございました。

(94. 12. 10)